広島研修の感想

長泉中　二年　曽川　莉之

僕は広島に行き、被爆建物、被爆樹木、被爆者の話を体感しました。そこには、原爆で亡くなった子の服、人影のある石、放射線で頭髪が抜けた子の写真、三色に変化した死体の絵、僕の想像を超えたまさに地獄でした。もしもこの時代に生きていたらと考えると、ゾッとします。この時の人達も、この地獄に耐えきれずに広島をでようと思ったのですが、爆風によりえぐられたアオギリが、その傷跡を包むように再び力強く成長を始めたのを目の当たりにして、「植物でもしっかり生ようとしているのだ。」と広島に残る人が増えたそうです。このアオギリが人々に奇跡を与えたと言う事を学びました。

僕の戦争へのイメージは、音楽で習った曲の

歌詞の一部でもあるように、

「脅かすことでしか守ることができないと、くり返す戦争忘れゆく愚かな権力よ。」

と誰かが考えないと、何度も何度もくり返されてしまう悲惨な事だと思っています。

被爆者の方が、

「八月六日は広島を出ていたが戻ってくると辺り一面まっ黒で学校に急いで向うと男か女か分らない死体がゴロゴロ転がってた。」

とおしゃいました。

僕は戦争を少し甘く見ていたと言う事が分かりました。まさかあれだけの人が亡くなって、今もそれに悩まされている人がいるなんて、考えた事もありませんでした。

このようにこれを機に今の平和な世の中で永遠に続くように、広島研修で得て感じたことを伝えていきたいと思いました。